

BLOG (1) / 近況と雑感

2024年2月15日

あめあめ、ふれふれ、かあさんが、・・・ (PDF)

こんな歌、いまでも学校で教えているのだろうか。

私が小学校にあがったのは1951年(昭和26年)4月だが、入学式の終わったその日の午後、自宅近くの公園にあった滑り台(コンクリートでできていた)のその着地点のあたりに年の同じチビたちが4、5人、なんとなく集まり、それぞれにクラスの様子や、ある種の恐れ、期待など入学式の印象について思い思いに語り合ったときのことを思いだす。

入学式後の1週間は毎日ほとんど遊びみたいなもので(学校の先生がこどものご機嫌とりをしているようで)比較的で楽しく(つまりはつうに)過ぎた。ところが、2週目に入って、突然、様子が変わった。自分だけがまったく何も知らないこと、他の子たちがみなはるか先方を早足に歩き去ってしまっているような幻想に襲われた。しかし、それは幻想でもなんでもなくて、ほんとうの事実であることに気づき、愕然となった。がけっぷちに立たされたような恐怖、なのに誰も助けに来てくれない孤独感。でも、これは自業自得、との思いもあった。なぜなら、前の年の秋口、9月であったか10月であったか、ひらがなを教えようとする母親の手をすり抜け、しめたとばかり外に出かけていった自分の姿を思い出していたからである。ああ、あれはそういうことであったのか、と気づいたが、むろん、もう手遅れ。取り返しのつかない遅れの中にある自分を呪った。

こうして2週間目。その週から私はいまでいうところの登校拒否児になった。

学校にまったく行かなかったわけではない。でも行くのがつらかった。だから、行かないための算段、サボタージュ、ぐずり作戦を毎朝考え、実行した。時々、運よく作戦が成功して行かずにすむことが、おそらく1か月に1、2回はあったと思う。通常のパターンを言えば、成功か失敗の分岐点は、8時。当時、毎朝8時過ぎから、「音楽の泉、お話は堀内敬三さんです」で始まる、そのものずばり、「音楽の泉」という番組があった。これを寝床でしばらく、半分くらいまで聞くことができれば、登校拒否成功という段取りであった。この番組、今は日曜だけの放送らしいが、私の記憶では、当時は毎日だったように思う(誰か、教えてください)。逆に、最悪の事態は、心配した母親に近くの医者連れていかれること。「具合が悪い」などと苦し紛れにいってしまった報いである(余分なことは言わぬがいちばん)。医者は、それでも診察してくれたが、結局、毎回、「どこも悪いとこ、なさそうだけど…」の診断。そんなこと医者に言われなくなって本人がいちばんよく知ってる、ってな、感じである。もちろん医者に行くのはきまりが悪かったが、そんなことは二次。きまり悪くてもなんでも目的は達成、その日は家でたらたらとすごすことができた。でも、登校拒否はちっとも楽しくなかった。外にでても、公園にも、道にも知った顔や遊び相手は誰もいなかったからである。学校などいなくても、やっぱり独りぼっちであった。

学校にまったく行かなかったわけではない、と書いた。じっさい、さぼりに成功することはまれで、だから、どうか学校にいった。いっしょに行く友達もいた。ひろし君といって、就学前の数年間、いちばんの仲良しだった。毎日、いっしょに遊んでいた。だから、クラスは違っていても、最初のころは、毎朝、いっしょに通学した。まず、

私が、ひろし君を迎えにいく。「ひろし君、がっこ行こう」といって扉（引き戸だった）をあけると、ちょうど（毎回、例外なく）お姉ちゃん（年子だった）のきんこちゃんと朝ごはんの真っ最中。きんこちゃんがじつにおいしそうに、サツマイモのお味おつけを食べるのを見ながら、待った。ふたりは急ぐ様子もなく、ふつうに食べた。学校は、歩いて 10 分ほど。墨田区立二葉小学校といった。いまでも、存在する。コンクリート造りの立派な校舎で、プールもあったが、3 階は焼け跡のままで使われず、授業は 1, 2 階だけで行われた。私の学年はそういうことはなかったが、他の学年では 2 部授業が行われていた。校庭はあっても狭かったので、運動会などは近くの日大一中の校庭を借りてやっていた。

1 年生のときの記憶として残っていることがいくつかある。

ひとつは、DDT の撒布。校庭にクラス全員が整列させられ、順番に白い粉を噴霧器のようなもので髪の毛の中にかかれた。後になって、DDT の薬害が指摘されたが、当時はそんなことお構いなしだった。

もうひとつは、隣のクラスに横綱吉葉山の子どもがいて、あるとき（多分、横綱になってすぐに）、その吉葉山が学校にくるといので、授業が中断され、みんなで校庭に出て、吉葉山を見ようと右往左往したことを覚えている。私は、吉葉山ではなくて千代の山の方が好きだったので、吉葉山にはあんまり興味なかったが、付和雷同して吉葉山を見る人ばかりに加わった。楽しくも、うれしくもなんともなかった。ちなみに、吉葉山の土俵入りは不知火型できれいだ、などと言われて、たいへんな人気だったが、私にはどうでもよいことに思えた。

そして、もう一つ。忘れることのできない、なんとなく、忘れてはいけない、と心の底ですっと感じてきた出来事がひとつあった。

雨の日の思い出である。

1 年生のときの担任が 6 月の人事異動とかでいなくなる前だったから、たぶん、6 月のことだったと思うけど、はっきりいつとはわからない。朝は雨ではなかったのに、下校時刻になってけっこうな雨が降りだした。私は、母親が傘を持って迎えに来ていたので、ふつうに帰れるはずだったが、ふと見ると、かっこちゃんが茫然と雨を見つめて立っていた。だれも迎えにこない。かっこちゃんは私のうちのはず向かいに住む女の子で、同い年。クラスは違ったがそれなりに仲の良い、というか気のおけない、いい子だった。お兄さんが 2 人とお姉さんがひとりいたが、お兄さん 2 人は、チビすけで意気地なしの私の面倒をよく見てくれた。メンコやビー玉で負けると、「どいつに負けた？ 取り返してやる、待ってな」といって取り返してくれた。そんなもんかと、ただうれいだけだったが、なぜそんなに優しいのか、いまならはっきりと分かるのだが、当時、感の鈍い私にはよくわからなかった。

あ、雨の日の話でしたね。それで、その日は、母と私とかっこちゃんの 3 人で、2 本の傘をさして帰路についた。途中、雨がどんどん強くなっても、なんだか楽しくて（たぶん 3 人で帰るのがうれしかった）、それで習ったばかりだった（と思われる）その歌を歌いだした。『あめふり』の歌だ。

あめあめ ふれふれ かあさんが
じゃのめで おむかい うれしいな
ピッチピッチ チャップチャップ
ランランラン …

まったくその日の光景そのままを歌ったような歌だった。だから、私は歌った。

でも、かっこちゃんは歌わなかった。

じっと前を見て、ただ前を向いて、濡れてもかまわない、といった風情で黙ってどンドン前を歩いていった。かっこちゃんも習って知ってたはずなのに、なんで歌わないのかな、と、ちょっと変には思ったが、とりたてて気にもしなかった。

だから、第2連も歌って、第3連にも元気よく入っていった。

あらあら あのこは ずぶぬれだ
やなぎの ねかたで ないている
ピッチピッチ チャップチャップ
ランランラン

すると突然、かっこちゃんが声をあげて泣きだしたのである。

「あらあら あのこは ずぶぬれだ
やなぎの ねかたで ないている ……」

かっこちゃん、濡れないですんでるのに、なんで泣くの？

第4連になっても泣き止まず、第5連になってもさらに大きく泣いた。

ぼくなら いいんだ かあさんの
おおきな じゃのめに はいってく

さすがに、私も異変に気づいたのだと思う。あるいは、母親が止めたのかもしれない。

ピッチピッチ チャップチャップ
ランランラン

と続けることはしなかった。

かっこちゃんが、あのとき、なぜ、あんなふう泣いたのか。そんな出来事があったことすらずっと忘れていたが、自分がかつて登校拒否児であったことをたまたま人前で話すことがあったときに、ふと、あ、あのとき、なぜ、かっこちゃんはあんなに泣いたんだろう、とあらためて思い返すことになった。70年近くもたった、そのときになってはじめて、散らばっていた記憶の断片を集め、かっこちゃんの悲しみに思いを向けることができた。

かっこちゃんにはお母さんがいなかった。戦争で亡くなっていたわけではない。もちろん、そういうお家もたくさんあった。でも、かっこちゃんのお家はそうではなかった。ほんとは、お母さんがいたのであるが、傘をもって学校に迎えに来てくれる、そういうお母さんはいなかったのである。と、書いてしまったが、事情は、じつは、ずっと

ずっと複雑だった。かっこちゃんのお母さんが優しくなかったのかどうか、それは知ることができなかった。そんなこと知っても仕方のないことだった。ただ、迎えに来てくれるお母さんはいなかった、と書くことしかできない。そういうことである。

その雨の日よりもずっと前の、その前の年か、前の前の年か、いずれにせよ、戦争が終わって数年たった、夏前の穏やかな陽気の漂うある晩、近所のお母さんたちが数人集まり、どこからか持ってきたリアカーに布団だのなんだのの荷物を積んで、薄暗い中を出かけて行った。母親もいっしょに行ってしまった。留守番だった私は、薄暗がりの中でうたた寝していたのだと思う。そして、悲しい夢を見た。目が覚めても、母親は帰っておらず、おぼろな夢の延長の中で悲しく、淋しい気持ちが残っていた。母親がお嫁になってしまう夢を見たのである。

その晩、おそく、母親は帰ってきた。私はただ、うれしいだけで、他のお母さんたちのことにまで頭が回らなかった。

その晩、近所のお母さんたちが数人連れだって出かけて行った理由、リアカーに布団まで積んで出かけて行った理由がわかったのは、そして、この私にもその訳が納得できたのは、それから数日たってからのことであった。お嫁に行ってしまったのは、私の母親ではなくて、かっこちゃんのお母さんだったのである。正確に言えば、かっこちゃんのお母さんはお嫁にいったのではなく、お家を追い出され、どこかに引っ越していったのである。あの晩、私の母親をはじめ近所のお母さんたち数人は、かっこちゃんのお母さんの引っ越しに付き添っていったのである。

しばらくして、かっこちゃんのお家に新しい若いお母さんがやってきて、赤ちゃんも生まれた。

それからまたしばらく経ってからのことだったが、母親が家の庭側の窓を大きく開け、梯子のようなものを外におろした。すると、なんとということか、かっこちゃんの前のお母さんがどっこいしょと家の中に入ってきたのである。母親とかっこちゃんのお母さんはちよつとの間、ひそひそ話をしていたが、すぐに私が手招きされ、小さな声で「かっこちゃん、呼んできなさい」と指示された。かっこちゃんはそつとやってきた。お姉さんや、お兄さんたちも三々五々やってきた。そういうことが何回か繰り返され、その都度、かっこちゃんはうれしそうだった。大きいお兄ちゃんやお姉ちゃんたちもうれしそうだった。かっこちゃんのお母さんもうれしそうだった。私もお菓子などもらってとてもうれしかった。そんなランデブーがいつ途絶えてしまったのか、私には、まったく記憶がない。

かっこちゃんのお母さんのことで、もうひとつ記憶に残っていることがあった。近所のお母さんたちが、ある晩、つれだつて三つ目通りにあったパチンコ屋にいったことである、その時には、うちでは父親もついて行った。たぶん、そのパチンコ屋で、かっこちゃんのお母さんは働いていたのである。

かっこちゃんも、生きていればもう、80歳だ。元気でいるだろうか。

*

『あめふり』（あめあめふれふれ）の歌の情報を以下に掲げておきます。

作詞：北原白秋、作曲：中山晋平。

1925年（大正14）に雑誌『ゴドモノクニ』11月号で発表された。YouTubeなどで聞くことができます。以下の動画では、「蛇の目」（蛇の目傘）が何たるかも納得できます。この世界において優しさと残酷とが隣り合わせであることにも気づかされます。

<https://www.uta-net.com/movie/13990/>